

## 私の被爆体験とヒロシマの心

### 松原 美代子



昭和 20 年 8 月 6 日、午前 8 時 15 分。

その日、女学校の 1 年生の私は、爆心地から 1.5 キロメートル離れた広島市の東南よりにある鶴見町で、学徒動員令による建物疎開の後片付けに行っていて、被爆したのです。

私たち女学校 1,2 年生を合わせた約 500 名と教師 11 名が、朝 7 時半までに比治山橋の袂に集合するよという命令を受けたものの、7 時 9 分に警戒警報が発せられたので作業場に行けず、行く途中暫く小屋や物陰に身を隠していました。すると間もなく警戒警報解除(7 時 31 分)となったので、急いで集合所に向かったのです。比治山橋から現場まで行く道は、昨夜来からのあの度重なる不気味な警報のサイレンから解き放されて、雲一つ無い真夏の太陽のもとでは、山も川も美しく、ひどく新鮮にさえ思えました。その比治山橋に沿って鶴見町の作業場に着くと小さな小屋がありました。私たちは弁当箱と救急箱を肩から下ろして、その小屋に入れて、作業にとりかかりました。建物疎開というのは、空襲を受けた時に火災が広がらないように、あらかじめ家を壊しておくことです。」

出動命令を受けた各地域、職域の国民義勇隊員や、中学校、女学校の低学年による動員学徒たちが、続々とその場所に集まっていました。

学徒動員令というのは、労働力が不足したために出された法律で、国民学校高等科の生徒や中等学校以上の生徒は、男子も女子もなんらかの形で戦争のために働かなければならなかったのです。そのため、或るものは工場に行って軍需品や兵器を作ったり、大人に代わって工場、会社、畑などで働いておりました。私たちのような低学年が、建物疎開の後片付けをしていたのです。

当時、勤労働員で駆り出された男女の学生生徒は、日本全国ではおびただしい数になっていました。昭和 20 年 3 月には、315 万 6,000 人となり、動員対象学徒の約 7 割におよびました。学校は、ごく一部を除いて、授業は停止されていました。教育は、日本全国からなくなっていました。私たちは壊れた屋根瓦や木や釘などを集めては箆や箆に入れ、4、5 人が一組になって、よっしゃ、よっしゃと掛け声をかけながら運んでいました。

その時です。親友の船岡多喜子さんが、「あっ、B29の音がする！」と叫んだのです。警戒警報解除なのに、そんなことはないと思いながら空を見上げると、やがて白い飛行機雲が見え、その跡を目で追うと、北西方面に去ろうとする飛行機がかすかに見えました。ずっと眺めていると、後尾から何かピカッと光る青白いともオレンジ色とも思える光を見たと思ったので、あわてて地面に身を伏せました。伏せたと同時に、私のすぐ隣でドカーンという地の底をもえぐるような轟音がし、私はとっさに自分が狙われたのだと思ったぐらいでした。それからどの位たったのでしょうか、気が

ついてみると辺りは暗く、土煙が立ちこめていて何も見えません。船岡さんの姿も、4人1組にいた友達もみんないません。みんな爆風で飛ばされたのでしょう。

私は、立ち上がって暫くじっと目を据えて辺りを眺めていました。するとだんだん足元が薄明るくなって、見えてきました。私は驚きました。2,3日前に、白い色は飛行機から目立つということで、一日がかりで茄子色に染めた上着と、もんぺが熱線で焼け、胸の辺りと腰の辺りの布地がぼろ布のように残っているだけでした。ただ土煙で汚れた白いシャツとパンティだけの姿になっていました。白いズック靴はそのままでしたが、足の甲が火傷ではち切れそうにふくれていたの、急いで脱ぎ捨てました。

そこで気がついたのですが、両手両腕、両脚、顔と、身体の3分の1以上が大火傷を負っていたのです。それもひどい火傷で、皮膚は腫れあがり、セロファンのようにつるりとむげて、中から真っ赤な肉を見せていました。両手の指や腕の皮膚はまるでボロ布のように垂れ下がり、ところどころ、黄色になって血を含んでいました。私は恐ろしくなって家に帰りたいたいと思、熱さも痛さもわすれて必死で逃げ出しました。人影の見える方向を求めて、暗闇の中を、がれきの上を転びながら、這うようにして夢中で逃げました。

すると、かすかに前方が透けて見えるようになり、やっとそこへたどり着くと、そこは橋の袂でした。

驚いたことに、岸辺には多くの被爆者たちが沢山集まっていました。学生から老人まで一様に、着ているものは熱線で焼け、顔は土煙で黒くなり、傷口から血が流れていました。白い歯だけ残して黒こげになった人、顔の皮がめくれて、何かに取り付かれたように歩いてくる人、走ってくる人、みんなあの呪わしい真暗闇の中から、冷たい水を求めて橋の袂に集まってきたのでした。途中で会う人々はみんな幽霊のようでした。

川もまた、真黒い煙と霧のようなもので覆われていました。ただ沢山の人々が、何やら呪文をとなえるような声をあげているのが、海鳴りのように聞こえました。みんな一様に両手を宙に上げ、もがき苦しむ顔を水面から出したり、没したりしていました。

私も体がたまらなく熱くなってきたので、引き込まれるように川の中に入っていました。すると、「松原さんじゃない」と、かぼそい声で近寄ってくる友に出会いました。私はその人が最初だれだかまったく判りませんでした。顔全体が大火傷で大きく腫れあがって裂け、顔の形がありません。特に下唇は大きく腫れあがり、首と顎の区別さえつかないほどでした。ぱっちり可愛かった目はどこにあるのか見分けもつきません。かの女は同じクラスの友人だったのです。余りにも変わり果てた彼女の姿を見て、私は驚き、かつ、痛ましく思えて見ておれませんでした。でも、こんな時に友と会えたことが本当にうれしくもありました。

このとき初めて冷静さを取りもどし、爆弾は自分だけを狙ったのではなく、みんなやられたのだということが判ってきました。それも、少々の被害ではないと思いました。

しっかりしなければ、しっかりしなければならぬと自分に言い聞かせながら、暫く川の中でじっとしていました。そして、他の友達の姿はないかと、捜し求めましたが、川の中は被爆した人たちでごったがえし、誰が誰だかさっぱりわかりません。

すると、今来た方向から一せいに火の手が上がっているのに気付きました。このままいると敵機にねらわれるか、或いは火の手が迫ってきて川から逃げられなくなると思った私は、その友人をせきたて、助け合いながら、ようやく川土手まで這い上がることができました。

そして、橋を渡りかけると、橋の上は多くの人たちが、まるで夢遊病者のように右往左往していました。再び火の手の上だった市内へ引き返そうとする者もいました。橋を渡って右へ曲がれば私の家、左へ曲がれば学校の方へ行く道につながっていました。

私たちは、無我夢中で学校の方へ向かっていました。比治山線の電車通りの電線は垂れ下がり、地面にたたきつけられていました。

街路樹は根っこごと倒れたり、丸裸になって、枝や葉っぱをそこらじゅうに散らかしていました。水を求めて家庭用防火水槽に顔を突っ込んだまま死んでいる人もいました。比治山の登り口辺りの道端には、力つきて倒れている老人や女性、学生らが所々転がっていました。血が流れて道路を赤黒く染めている所もありました。

少し行くと、火のついた我が家を一度は逃げ出したものの、また思い直したように、ものすごい勢いで燃えさかる家の中に駆け込もうとする女の、それを男の人がしっかりと抱きしめて離そうとしません。母親は狂ったように、「離して！坊やが...」と泣き叫んでいました。それは、とてもこの世のでき事とは思えない、生き地獄そのものでした。

私たちは何か恐ろしいものに追いかけてられているように走りつづけました。そして、とある橋の袂に来ていました。たしか荒神橋だったと思います。東練兵上方面へ行くという彼女と、学校へ帰りたいたいだした私とは、橋を渡る前で別れることになりました。二人は泣き泣き別れましたが、それはつらい別れでした。日頃、とても気丈だった彼女が、焼けただれて形のくずれた顔をほころばせ、大粒の涙をぽろりとこぼし、何も言わず、暫くつつ立ったまま動こうともしませんでした。それが彼女との最後の別れになろうとは...

彼女と別れた私は、学校がある方向へと急ぎました。段原商店街のせまい道路は、傾きかかった商店や家々のガラス戸の破片や戸板、天井、棚などが飛び散らかって、足の踏み場もなく、私は道の隅っこを這うように通り抜けました。

やっとの思いで、我が校である広島女子商業学校にたどりつきました。道路から見える校舎は全壊に近く、わずかに便所と記念館が形をとどめているにすぎませんでした。

私は校門に入ることさえできず、暫くその場に佇んでいましたが、気を取りなおして歩き続けました。

ようやく、私の出身校である大河国民学校付近まで逃れて帰ってきたとき、私はもう、これ以上の熱さと痛みには耐えられなくなるととうとう学校前の溝口さんの軒下に身を休め、救いを求める以外にどうすることも出来なくなりました。この時、運よく通りかかれたのが、我が子の安否を気遣って市の中心部に向かう途中の、北大河の浜村アキノさんでした。おばさんは私を家まで背負って帰ってくれましたが、誰も居らず、近所の人々の助けを借りて、私は再び緊急救護所になっていた大河国民学校へ戸板にのせられて運ばれました。

被爆後、何日たっていたのでしょうか、間もなく私は 40 度近い高熱におそわれ、血便症状が続き、

歯ぐきから出血し、頭髪もぬけて半坊主になりました。こんな状態が 10 日も続いたでしょうか、一度は死にかけて、昏睡状態から意識が戻ったとき、私の周りには近所の人たちが心配そうに私を見守っていて下さいました。私はあらためて、いま自分が生かされていることの尊さを、ひしひしと感じました。こうして一度は死にかけた私でしたが、8 か月かかって全治することができました。

私は自分の火傷の顔がどんなふうになっているのか一番気にかかったので、「早く鏡を見せて…」と、母に言っていました。母は決して鏡を渡してくれませんでした。自分の足で歩けるようになったある日、こっそり鏡を覗いて、私は呆然として声も出ませんでした。そこには母に貰った顔はなく、別の顔が映っていたのです。まるで赤鬼のように大きく腫れあがって、目の辺りは熟したトマトのようにくずれ、眉毛がありません。これが自分の顔かと思うと、とめどなく涙があふれて止めることができませんでした。母がもっと手厚く治療してくれていたなら、また戦争さえしなかったら、こんなことになっていなかったのではないかと、独り想う時、私は泣けて泣けて仕方がありませんでした。そんな時、母は、「お前に代わって、自分が原爆を受けてやればよかった。自分は老いさき短いことから、戦争がうらめしい」といって、なげき悲しみました。また、私がおだえ苦しむ時、母は、「いっそのこと、あの時、死んでくれていた方がよかった」と泣きました。私が生きるか死ぬかの瀬戸際で、母は自分が大切にしていた着物などを背負っては田舎に行き、食糧と交換したり、注射に替えて治療してくれたことを私は思い出し、これ以上母を苦しませてはならぬと決心し、それ以来決して母の前では泣かない強い子になりました。

こうして 8 か月の治療を終えて再び登校して見ると、約 250 名いた学友はたった 50 名そこそしか来ていませんでした。

原爆を受けていても、馬鹿にされたくない一心で一生懸命勉強しましたがけれども、顔にケロイドがあるということで、就職ができませんでした。また、男の人は被爆者と結婚しなかったのです。

一度はあきらめていた手術も、8 年後の 20 歳の時、大阪で7か月にわたり、12 回の形成手術を受けました。閉じなかった瞼も閉じるようになり、曲がったままの指も伸ばすことが出来、私は喜びで一杯になりました。この感謝の気持ちを何らかの形で表したいと思って広島に帰ってきました。

丁度そのころ、この手術の機会を与えてくださったキリスト教流川教会の谷本清牧師が、身寄りの少ない、幸せ薄い盲児のための施設を設立されたので、私はその 30 人の子どもたちの保母として 8 年間働きました。この福祉の仕事を通じて、やっと自分の生きる意味を見出したのです。このころから原爆について深く考えるようになりました。「戦争、原爆をつくり出すのは人間だ。人間が本気になって戦争を、核兵器を憎み、悪を訴え、核兵器廃絶への声を広めなければ、私たち人間は過ちを繰り返すことになる」と思い、自分の人生を核兵器廃絶にささげる決心をしたのです。

それから、広島平和文化センターに27年間勤務しました。退職後は、毎年2回海外で被爆体験を話しています。最近、インターネットで海外の人たちと交信しています。

私たちは今、広島を訪れる若い人たちにも被爆体験を語る活動をしています。その際、アジアにおける旧日本軍の犯罪についても謝罪を込めて話をしています。しかし、私はまた、原爆投下を単なる戦争行為としてだけとらえないで、広島、長崎への原爆投下によって、人類は核時代という

「破滅の時代」の扉を開いたこと、世界の核兵器は、地球上の生き物を何回も繰り返して殺すことができるほどの数があること、もし再び、核兵器が使われることがあれば、人類は滅び、そこには勝者も敗者もなく、加害者も被害者もなく、無があるだけだということ、人類は広島、長崎から未来を生きるための教訓を学びとらなければならないこと、を語っています。

インド、パキスタンが核兵器を保有し、核兵器拡散への愚かな道を歩もうとしている中で、イギリスが核軍縮の方針を打ち出したことはわずかな望みですが、そのイギリスも核兵器を放棄しようというわけではありません。この重大な局面を迎えているときこそがチャンスです。核兵器保有国を増やすなか、5大国が核軍縮、核兵器廃絶に向けて真摯に努力してくれるのか、私たちはそれを見極めなければなりません。核兵器がある以上、世界に平和はありません。核兵器と人類は共存できません。私も体の続く限り、死者に代わって、核兵器が廃絶されるまで、広島からの訴えを続けるつもりです。去年より今年、今年より来年と少しずつでも核兵器廃絶に世界が向かっていくよう、被爆者の言葉で世界に伝えていきたいと想っております。